

# 初等教育教員として児童の造形活動を支援するために求められる能力に関する考察(6)

～総合的な学習における造形的な活動について～

初田 隆\*

(平成12年10月31日受理)

## はじめに

兵庫教育大学学校教育学部附属実技教育研究指導センター(以後、実技センターとする)美術分野では、標記の能力について、多角的に検討を重ねてきた。これまでは、主に、図画工作科の学習を支援するための能力を想定してきたが、周知の通り、2002年度より「総合的な学習」が実施されることによって、今後は、図画工作科と総合的な学習とを関連させた支援や、総合的な学習の中で造形的な活動を支援するといったケースにも対応していかねばならない。

そこで本稿では、「生きる力」や総合的な学習の意義やねらい、また、教育現場における取り組み状況などを確認しつつ、総合的な学習と美術教育との基本的な関わりについて考察する。そして、今後、初等教員養成課程において育成すべき資質・能力のアウトラインを示すこととする。

## 1. 「生きる力」と美術教育の理念

総合的な学習の目指すものは「生きる力」の育成である。これは「自己教育力」(S5 8、中教審)や「個性重視の教育」(S6 2、臨教審)、「新しい学力観」などを発展的に継承したものを見ることが出来る。また、臨教審第2次答申(S6 2)に端を発する「生涯学習体系への移行」という流れの中に位置づけることもできよう。

第15期中央教育審議会の第1次答申によると、「生きる力」は「自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力」、「自らを律しつつ、他人と共に協調し、他人を思いやる心や感動する心など、豊かな人間性」、そして、「たくましく生きるための健康や体力」からなる広義の「力」として想定されている。

答申から、美術教育との関わりが密接であると考えられる記述を挙げるならば、まず、「生きる力」の要素として「美しいものや自然に感動する心といった軟らかな感性」、「過去から連綿として受け継がれてきた我が国の文化や伝統を尊重する態度」、次に「育成すべき資質・能力」として「我が国の文化と伝統に対する理解と愛情を育てるとともに、諸外国の文化に対する理解とこれを尊重する態度」、「芸術を愛好し、芸術に対する豊かな感性

を育てること」、「他人を思いやる心、生命や人権を尊重する心、自然や美しいものに感動すること(中略)など豊かな人間性を育てるとともに、自分の生き方を主体的に考える態度を育てること」などである。

一方、今日の美術教育は、基本的には「画家や彫刻家のように美術のプロの養成を目的とする」のでも「単なる造型感覚の陶冶、情緒の安定を目指すだけに終わるもの」でもなく、「美術教育の目指すものは『かく』あるいは『つくる』という造形活動を通して、諸能力を発達させ、人間として生きていく力を養い、ひいては人格の形成を促すもの。つまり、人間として成長していく基礎教育の一つ」<sup>1)</sup>であると理解されている。人間形成の一環として、子どもの全人格的発達を目指すものである限り、美術教育の理念は「生きる力」と本質的に通底していると観るべきである。

また、日本教育大学協会全国美術部門・新教育課程検討特別委員会では、これまでの美術教育が「主体的に学ぶ力」、「思考力」、「想像力」、「創造力・創造性」、「表現力」、「意欲と自信」、「感性」、「愛情」、「生きがい」などの育成に寄与してきたことを主張している<sup>2)</sup>。「生きる力」についての論議は、これを教科教育としてどう受け止めるかということよりもむしろ、戦後美術教育が獲得してきた知見を整理し、「生きる力」と繋がる視座をいかにして見出していくのかという論議に置きかえることが妥当であるともいえる。

また、私たちが今日直面している環境や国際、情報、福祉、少子高齢化などの課題・問題は、複雑にして深刻である。これらは互いに連関しており、それぞれのメカニズムや因果関係を知るだけではなく、各人が当事者意識を持ち、実際に適切な行動をとりながら解決にあたらねばならない。倫理観や感性、想像力のレベルで問題を捉え、創造的に解決していかねばならないと言うことである。美術教育がその教科性を活かしていくためには、子どもの感性や創造性を引き出すと言う視点から、総合的な学習に参画していく必要があると考える。

現在、美術教育の立場からは、総合的な学習に反発する声も聞かれるが、多くは、実施に伴う、教科の時間数削減への不満や、総合的な学習で造形活動が道具的に扱われるのではないかといった危惧などであり、理念にお

\*兵庫教育大学 学校教育学部附属実技教育研究指導センター (美術教育分野)

いては概ね賛同されているように思われる。

## 2. 総合的な学習の意義

本項では、総合的な学習の設立の背景、ねらいや特質などについて確認しておきたい。

### 2-1 総合的な学習が求められる背景

「総合的な学習の時間」は、「生きる力」が全人的な力であること、及び国際化や情報化などの社会の変化に主体的に対応できる資質能力が求められていることを理由に、教科・領域の枠を越えた新たな科目として創設されることとなった。また、地域や学校に応じた創意工夫のある教育活動が展開できるような時間として位置づけられたのである。

しかし、「総合学習」自体には、ほぼ1世紀にわたる歴史があり、様々な実践が行われてきた。加藤幸次は「総合学習の源流」として次の3つを挙げている。

- ①デューイ・スクールにおける集団活動を中心とした総合学習
- ②インフォーマル教育やオープン教育における個人プロジェクト（個人の興味・関心を重視した総合学習）
- ③教科の専門化・細分化に対する反省としての関連カリキュラムや融合カリキュラム

①、②では、子どもの生活や経験、興味・関心を基礎として学習が構成され、子どもの主体的な追求活動が期待される。③は教科間の関連性に基いて構想される総合学習であるが、テーマによっては現代的な課題に対する学際的なアプローチを可能とするものである。いずれも教科を中心とした教育に対するアンチテーゼとしての色彩が濃い。公教育が始まって以来、教科の体系を尊重するか、子どもの意識や生活を重視するかという相反する教育観のせめぎあいが続いてきたのである。

水越敏行は、日本の教育思潮が30年から40年の周期で変わってきており、それに依ってカリキュラム編成の重点も「子どもから」と「教師から」の間を移動してきていると指摘している<sup>9)</sup>。現代は、「子どもから」の教育へと、教育思潮がシフトしてきたと観ることができる。

総合的な学習が求められる理由として一般に喧伝されているものは次の通りである<sup>9)</sup>。

- ①教科内容の細分化や専門化への反省
- ②「親学問」の変貌＝学際的な学問分野の登場
- ③単一の学問からのアプローチでは解決困難な問題(環境問題、医学倫理など)への対応の必要性
- ④変化する社会的ニーズや、子どものニーズへの対応
- ⑤応用力や問題解決力の育成が各方面から要請されていること
- ⑥知識の獲得についての脳研究の成果
- ⑦メディアの発達により多様で最新の情報へのアクセスが可能となったこと

### 2-2 総合的な学習のねらい

1998年12月に告示された学習指導要領では、「総合的な学習の時間」におけるねらいを小・中ともに次の2点にまとめている(総則)。

- ①自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育てること。
  - ②学び方やものの考え方を身につけ、問題の解決や探究活動に主体的、創造的に取り組む態度を育て、自己の生き方を考えることができるようにすること。
- 従来の受け身の学習ではなく、学習の中心に自己を据え、主体的に問題解決を図っていくことや、学び方そのものの獲得が重視されている。

そこで、総合的な学習の成立条件として「学習主体(わたし)」と「学習方法(方法)」、「学習対象(内容)」また、コミュニケーション能力や「まとめ方、報告や発表・討論の仕方」(教課審答申)などを強調するために「表現」を加えた4つの要素を想定し、総合的な学習のねらいを図に表してみた(図1)。

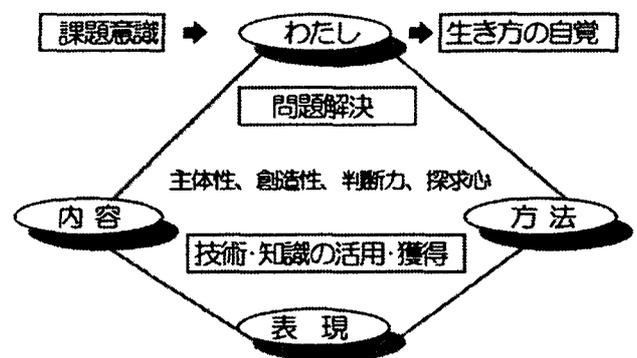


図1 総合的な学習のねらい

予め設けられた学習内容を固定的な方法で学んで行くのではなく、子どもの問題意識から学習が始まり、様々な方法を用いて問題を解決していくなかで、学び方や考え方を深め、ひいては自己の生き方の自覚に繋がるような「学び」がねらいとされているのである。

子どもの生活や生き方と切り離し、「一方的に知識を教え込むことになりがちであった」従来の教育の反省に立ち、学ぶ主体としての子どもを全面的に尊重した教育への方向性が示されたものと受け止めたい。

### 2-3 総合的な学習の特質

総合的な学習の特質として、子どもたちの生活や経験に基づいて学習活動が構成・展開され、子どもが学習に主体的に参加できること、平たく言えば子どもが学習の中心になるという点をまずは挙げておく。

平野朝久は、総合的な学習を「はじめに内容ありき」と「はじめに子どもありき」の2つのタイプに区別した上で、前者は「従来から一般的に多く行われてきた授業のあり方と基本的に同一の立場に立っている」ものであり、子

どもにとっては「教師の敷いた路線を歩まされるのであり、教師から与えられたことをこなす学習である」としており、「はじめに子どもありき」の立場に立つことの重要性を指摘している<sup>6)</sup>。

デューイは「子どもが太陽となり、その周囲を教育の諸々のいとなみが回転する。子どもが中心であり、この中心の周りに諸々のいとなみが組織される」と述べているが、総合的な学習の基本的な特質が示されている。

次に、総合的な学習は「学習対象」及び「学び」自体の総合性に立脚した学習であるという点を挙げておきたい。

子どもたちにとっては教科の弁別はさほど重要ではなく、今行っている活動が理科の授業であれ、図画工作科の授業であれ、その活動自体が重要なのである。むしろ、教科の論理で学習対象が与えられた場合、子どもの興味と乖離していくことも多い。例えば、風車をテーマにした活動を考えた場合、風を受ける仕組み、羽根の形や模様、風車を利用した玩具、各国の風車、風車から動力を取り出すことなど、幾つかの側面からのアプローチが考えられるが、図画工作科で扱う場合はデザイン面、理科では風を受ける仕組みなどが強調される。子どもにとっては、風車という学習対象から喚起される、自分なりの興味や課題意識を深めていきたいと思っても、教科の枠組みに阻まれて、結局は与えられた活動を受動的にこなしていくことにもなる。本来、あらゆる学習対象は総合的に存在しており、子どもに応じた様々なアプローチが可能なのである。

また、学ぶということについても、単に記憶するだけでなく、感じ、考え、体験を通したりと、総合的に行われてこそ、知識がしっかりと身につくのである。レイチェル・カーソンは「センス・オブ・ワンダー」(神秘さや不思議さに目を見張る感性)の中で次のように述べている。「美しいものを美しいと感じる感性、新しいものや未知なものにふれたときの感激、思いやり、憐れみ、賛嘆や愛情などのさまざまな形の感情がひとたびよびさまされると、次はその対象についてもっとよく知りたい

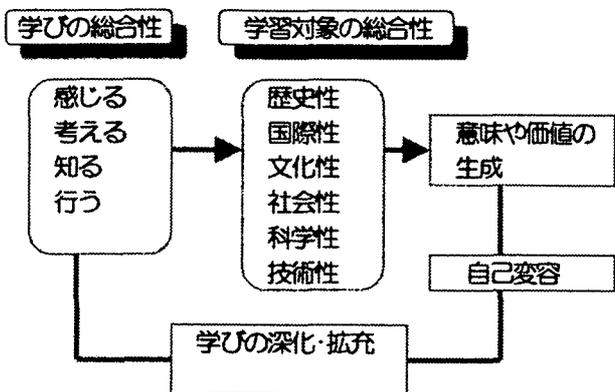


図2 「学び」及び「学習対象」の総合性に立脚した学習

と思うようになります。そのようにして見つけた知識は、しっかりと身につきます」<sup>7)</sup>。つまり、事実をうのみにするのではなく、様々な感情や感覚などが豊かに関わってこそ、子どもが自分で知りたいと感じ、自分で知識や知恵を身につけていくことになるのである。

総合的に存在する学習対象を総合的に学んでいく中で、学びは深化し、また、拡充していく。そして、子ども自らが学習対象についての意味や価値を見出すことによって、自己の生き方にまで関わる学びが達成されるものと考えられる(図2)。

以上述べてきたように、総合的な学習とは、子どもが、身の回りに存在する学習対象(ひと・もの・こと)に主体的、専断的に働きかけ、世界のあり方や自己の生き方を探っていく学習である。別言すると、子どもの生活や興味・関心を起点に学習が始まり、主体的な追求活動や表現活動が行われ、その結果が子どもの自己変容に繋がる学習であるといえる。従って、総合的な学習の学習過程をモデル化すると図3のようになる。

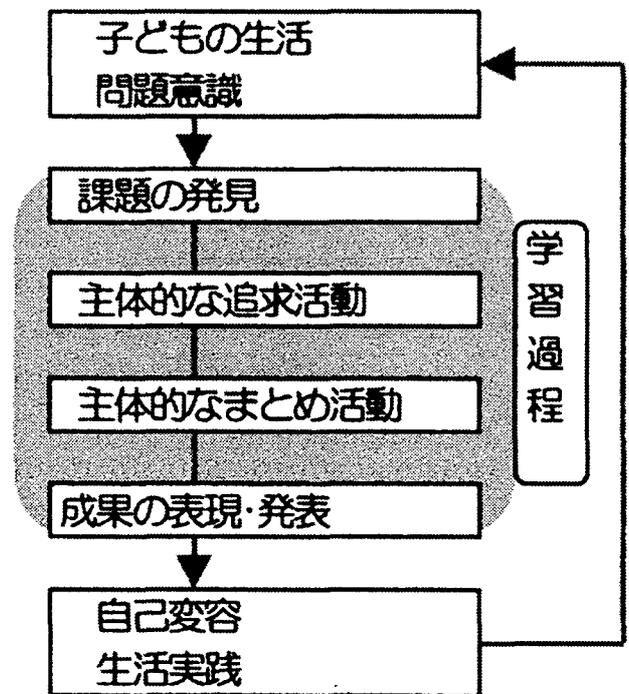


図3 総合的な学習の学習

### 3. 総合的な学習と美術教育

前項では総合的な学習の意義について、設立の背景やねらい、特質といった側面から確認してきた。先にも述べたように、美術教育においてもこれまで、人間形成の一環として、「主体的に学ぶ力」や「創造力」、「感性」などの育成を担ってきたのであり、総合的な学習に象徴される今後の教育の方向性とは軌を一にするものである。

とはいえ、総合的な学習と図画工作科の学習とをどのように関連付けていくのかという実際的な課題について

はさほど研究が進んでいるとは言えない。本項では、かかる課題について検討する。

### 3-1 関連性を引き出す視点

教科とは一般に教育内容のまとまりを意味するが、図画工作科の場合は当然、造形表現に関わる学習要素を、美的情操や創造的表現力の育成といった目標のもとに結合させたものと捉えることができる。前回の学習指導要領改訂によって表現と鑑賞の2領域にまとめられたものの、基本的には絵画、デザイン、彫塑、工芸という、美術文化に対応した内容構成となっている。従って、図画工作科の教科内構造は、美術文化及びそれを支える社会・自然などの教科外構造に包摂されていると捉えることができる(図4)。

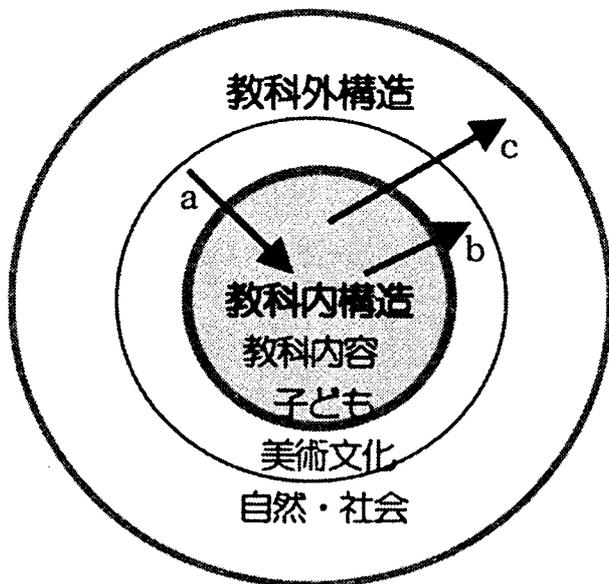


図4 教科の内・外構造-1

従来の図画工作科では、図中aに示したように、美術文化から教科内容が規定される傾向が強かったものと思われる。「新学習指導要領Q&A 図画工作編」においても「従来の図画工作科では『技法』が指導の前面に出ていました。多くの教師が『技法』を知らないから子どもは表現しないのだという考え方で、まず技法を教えるという実践がなされてきました」と解説されている。そこで同書では、「一斉指導の中で技法が教えるべき内容の中心になることは考え直すべきです。むしろ、自分の表現にぴったりの技法を技能化していくことこそ求められています」と言う方向性が語られている。「技法が教えるべき内容の中心になる」学習（つまりは美術文化から教科内容が規定される学習）からの脱却が求められているのである。

新教育課程では、子どもの表現意欲や主体性、個性的な追求過程などがこれまで以上に重視されることとなる。つまり、一般的な美的基準から子どもの表現活動が規定されるのではなく、あくまでも子どもの側から自分

なりの美的世界を構築していくことが重要となる。図中bに示したように、子どもの論理から美術文化を取り込んでいく視点が求められていると言えよう。

また、総合的な学習との関連性を見出すためには、図中cに示したように、美術文化を支える教科外構造（自然や社会）に着目する必要がある。例えば、土器を作る学習を想定した場合、従来の教科学習では、土器の形、模様などの造形性に学習の重点が置かれていたと思われるが、総合的な学習との関連から土器の学習が構想された場合は、土作りや、野焼きなどの活動を通し、自然との交流によってものを生み出してきた人類の歴史など、土器の背後に広がる世界と触れ合うことが期待されるのである。

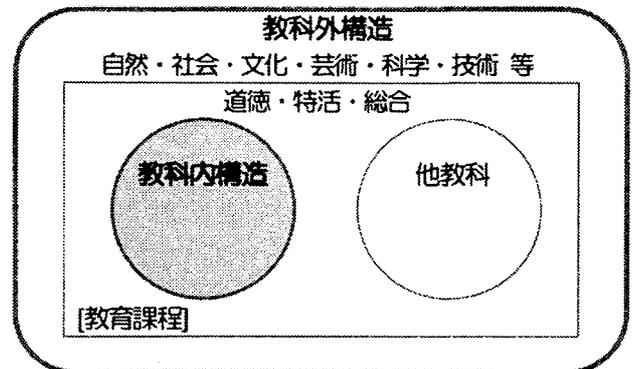
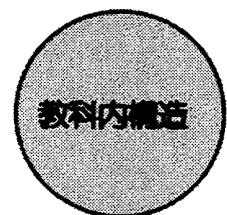


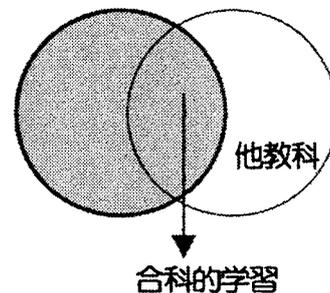
図5 教科の内・外構造-2

図5は図画工作科と他教科等との関係を表したものである。他教科、教科外活動(道徳・特活・総合等)等が図画工作科に隣接する教科外構造となり、その外周を自然や社会などの現実世界が取り巻いていると言った構造である。この図をもとに、新教育課程において想定される図画工作科学習を次の4タイプに種別する。

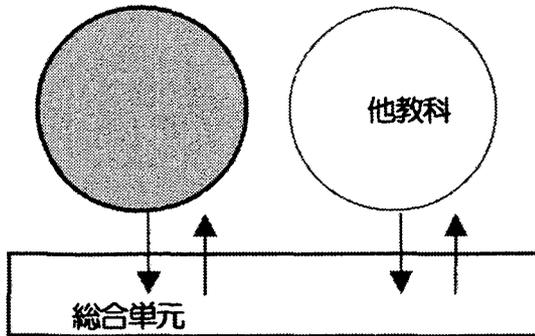
#### ①教科単独で行われる学習



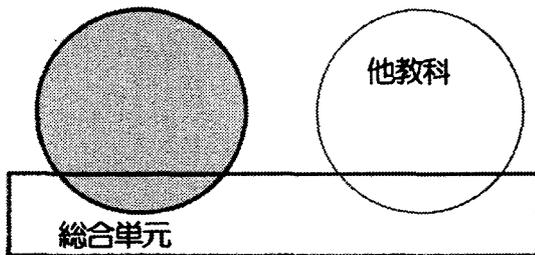
#### ②合科的学習



### ③総合単元との関連学習



### ④総合単元に含まれた造形学習



## 3-2 図画工作科を主体にした合科・関連学習

「合科的学習」あるいは「合科的な扱い」と一般に呼称されている学習は、教科の枠組みは保持したままで、それぞれのねらいをよりよく達成させるために、2乃至は3の教科を単元レベルで結合させたものであり、いわゆる合科教授 (Gesamtunterricht) とは繋がってはいるものの、あくまでも教科カリキュラムの問題点を部分的に補完するために提起された学習形態である。

楽器を作り演奏する、音楽を鑑賞しそのイメージを絵画化するなどは、図画工作科と音楽科の合科的な学習である。「読書感想画」は図画工作科と国語科との合科的な指導と言えるが、読書感想画の普及指導に努めている谷口豊が「読書感想画を描くことによって、絵がより好きになり、読書がよりのしくなってくれば言うことはありません」と述べているように、合科的に扱うことによって、それぞれの教科目標がよりよく達成されるように構想されねばならない。

図画工作科が音楽科や国語の一部と結びつきやすいのは、教科の特性や教育目標が類似しているからであるが、土器作りと社会化の歴史学習を結合させたり、科学玩具の制作を行うなど、体験(制作)を通した問題解決学習として、合科的学習を組織することも今後は重要になってくると思われる。

一方、総合的な学習と関連付けて行う場合も検討されねばならない。次に述べる「総合単元に含まれた学習」と一線を画するのは、あくまでもその学習が図画工作科の時間内に行われ、図画工作科としての目的をよりよく達成するために関連付けるという点にある。図画工

作科単元の発展として総合単元に移行していく場合や (a)、総合単元から図画工作科単元に移行してくる場合 (b)、また、総合単元の展開過程で造形的に問題を解決する必要感に迫られ行う場合などが考えられる(c)。

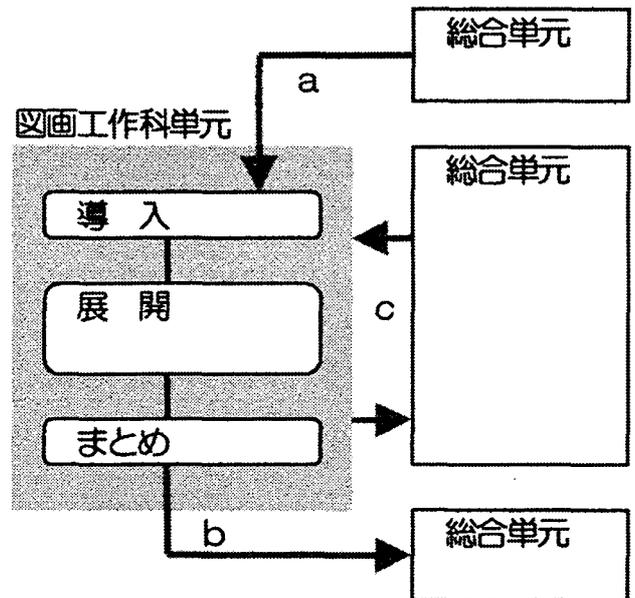


図6 図画工作科単元と総合単元

## 3-3 総合単元に含まれた造形学習

本項では、総合的な学習の単元展開過程に組み込まれた造形活動について考察する。

新学習指導要領の移行期に入り、大半の小学校では総合的な学習の研究・実践が盛んに行われており、とりわけ学習成果のまとめや発表などで、造形的な活動が仕組まれていることが多い。

小野市立小野東小学校の研究発表会(2000年11月2日)を取り上げ、当日の公開学習において造形活動がどのように取り入れられているのか検討してみたい。公開学習の概要、及び主な造形活動は以下の通りである。

○1年(生活科)「秋ランドで遊ぼう」

幼稚園の園児を「秋ランド」に招待し、自分達が作った玩具やゲームでいっしょに遊ぶと言う学習である。木の葉や木、草の実などの秋の素材を用いて、アクセサリー、的当て、輪投げ、こすりだし、落ち葉の貼り絵、葉っぱの迷路などの制作、遊びをグループ毎に行っている。

○2年(生活科)「小野東の秋を見つけよう」

秋の収穫物を使って楽しむ「オータムフェスタ」の準備に取り組む様子が公開された。造形活動を行っているグループは、楽器作り、招待状作り(紙すき)、草木を使った工作、秋のお話し(ペープサート)の5グループで、他のグループは調理活動を行っている。

○3年(総合)「タイムマシンで昔へワープ」

祖父母の時代についての聞き取り調査をもとに、演劇で表現する学習。各クラスのテーマは「学校のようす」、

「農業のようす」、「くらしのようす」となっており、更に学級内で小グループに分かれている。それぞれ、小道具、背景画等を制作している。

○4年(総合)「点字から考えよう」

「目の不自由な人のことをくわしく知ろう」というテーマで追求活動が行われ、その結果を発表している場面の公開である。発表の為に掲示物やパソコンのプレゼンテーションなどに造形的な学習要素が見られる。

○5年(総合)「創ろうファンタジー STAGE2000」

自然とのふれあい体験をもとに構想された、ミュージカルに取り組んでいる。中間発表の場が公開された。コスチュームや大道具、小道具などが制作されている。

○6年(総合)「温故知新」

子どもたちが、それぞれの「こだわりの歴史」を追求し、その結果や過程を掲示物にまとめ、ポスターセッション方式で発表する様子が公開された。制作物や収集物も展示されている。バットやグローブ、かかし、浄土寺の模型、縄文土器、墨など17グループが発表を行った。

以上、主な造形的な要素、制作活動を挙げてみたが、総合的な学習の中では、およそ次のように造形活動が用いられているのではないだろうか。

- 
- A 総合単元を構成する造形活動
  - B 道具的・補足的な造形活動
  - C 造形的な態度や感覚とかかわる活動
- 

Aは「秋ランド」や「オータムフェスタ」のように、単元構造図の中の主な経験活動として、各種制作活動が位置づけられている場合である。制作活動を通して秋を味わったり、制作物を媒介として招待客と交流することになる。また、6年の学習では、野焼きや墨づくりなどが、過去の人々の知恵を学ぶ重要な体験活動となっている。このように、造形活動を通して単元のねらいに迫ることができるように構想された場合と、演劇表現のように一つのプロジェクトを遂行するための部分的な要素として造形活動が用いられる場合(B)があるが、いずれも造形活動が欠かせない要素となっている。一方、研究成果を掲示物やパソコン画面、パンフレットなどにまとめる活動では、意識的に造形活動を行う訳ではないが、わかりやすさや美しさを考えて文字のデザインやプレゼンテーションを行う必要があり、造型感覚や造形的な態度が求められる。また、イベントを行うための小道具を作ったり、会場を飾ったりする活動も同様である。

三者ともに造形活動が子どもの活動を活性化したり、学びを豊かにするポイントとなっている。逆にこれを疎かにすると子どもにとっては満足度の低い学習になる可能性もある。山際隆は、「総合表現」の重要性を提唱しており、表現を基軸に総合学習の構想を立てていくこと

が総合学習をダイナミックなものにする要件であるとしている<sup>11)</sup>。造形活動を総合単元の中に積極的に位置づけていくことが、総合学習の可能性を拡張することになる。また、このことによって、美術教育自体も深化・拡充していくのではないだろうか。

#### 4 初等教員養成課程において育成すべき能力

以上見てきたように、新教育課程では「生きる力」の育成を目標とし、総合的な学習や他教科との関連を図りながら図画工作科学習の構想・実践を進めていかねばならない。その為には、道具や素材についての知識や一定水準の実技力、そして、課題内容や子どもの到達度に応じたサポートをするための指導力などを、教師が身につけておく必要がある。

初等教員養成課程においては、今後、次のような点を勘案し、教員の養成にあたらねばならないだろう。

##### ①「生きる力」を育成するための意識変革

[児童観の転換] 子どもを教授の対象として捉えるのではなく、生涯にわたって自ら主体的に学び続ける学習者として捉える。

[学力観の転換] 知識の量や獲得の速さではなく、生きてはたらく学びの知恵、生涯にわたって学び続けていくための学び方や感性、創造力などを重視する。

[指導観の転換] 教師主導、画一的な指導ではなく、個に応じた支援の立場に立ち、子どものよさを引き出し、学ぶ喜びを味わわせるようにする。

[評価観の転換] 学びの結果だけではなく、子どもの個性(よさ)を伸長するという視点から、学びの過程や学んだことによる変容、実践的な態度などを全体的に捉える。

②社会の変化や教育課題に対応するための感性や創造力  
今日の変化の激しい時代にあっては、社会の変化や教育の課題を的確に把握できる感覚や感性、課題解決に主体的に取り組むことのできる創造力などの資質能力を、教師自身が高めていくことが期待される。

##### ③教育実践力

現代の教育課題を反映させるために、自主的に教育計画(教材分析、教材開発、カリキュラム編成等)を推進する必要がある。また、子どもの実態に即した適切な課題を設定し、子どもたちの多様な造形性に応えながら学習を展開していくことが望まれる。

##### ④クリエイティブな実技力

応用・発展が可能な実技力を高めておく必要がある。条件に応じて造形要素を適切に結合させ、造形的な課題を解決したり、自らの造形体験を子どもの立場に置き換えて対象化することが望まれる。

以上、これからの教員に期待される能力のアウトラインを示したが、今後、これらの能力を育成するためのプログラムの検討を進めていかねばならない。

## 注 記

- 1) 東山明「美術教育と人間形成」創元社、1986、24～25頁。
- 2) 日本教育大学協会全国美術部門・新教育課程検討特別委員会  
編「21世紀を展望する芸術[美術]教育の基礎的検討」  
1996、  
36～41頁。
- 3) 加藤幸次「総合学習の思想と技術」明治図書、1997、20～30頁。
- 4) 水越敏行「総合学習の理論と展開」明治図書、  
1998、7頁。
- 5) 以下を参考にまとめた。高浦勝義編著「総合学習の理論」黎明書房、1997、12頁。／加藤幸次、前掲書3)、9～13頁。
- 6) 平野朝久「子どもが求め追求する総合学習」学芸図書、1995、13頁。
- 7) デューイ、宮原誠一訳「学校と社会」岩波書店、1957、45頁。
- 8) レイチェル・カーソン、上遠恵子訳「センス・オブ・ワンダー」新潮社、1996、23頁。
- 9) 藤澤英昭・水島尚喜編「新学習指導要領Q6A図画工作編」教育出版、1999、7頁。
- 10) 谷口豊「読書かんそう画のかきかた」ポプラ社、1989、79頁。
- 11) 山際隆・田中博之「『総合的な学習』をどう創るか」明治図書、  
1999、61頁。